

学習内容と現在をつなぐテーマで興味喚起し、「自分の考えを発信する力」を育む

米沢工業高校 定時制 (山形・県立)

高橋英路先生

教員歴9年。経済学部で地域経済学を専門に学んで社会科の教員免許を取得。初任校で出会った先輩に自分から学びに出かける姿勢を教わり、県外の研修やセミナーにも積極的に参加するようになった。大人しくて目立たない生徒など、「手がかからない」と思われやすい生徒の思いを汲み取ることを大事にしたいという。



問題に直面したときに
授業で学んだことを
現在と結びつけて考え、
自分の言葉で発信できる人に。

どんな授業なのか

教科の学びと安心安全な場で、
考えを発信する力を養う

米沢工業高校の定時制の生徒には、

小・中学校で一度不登校になるなど、学校生活になじめなかった経験をもつ生徒が多い。3年前、この高校に異動してきた高橋英路先生は、担任した1年生総勢10人に、こんな印象をもったという。「周囲に受け入れられるか不安で、自分

の考えを表現することにやや苦手意識をもっているようだ」と。

だから高橋先生は、2年次から、コミュニケーションに特に困難を感じている生徒数名に、始業前のSST(ソーシャルスキルトレーニング)を始めた。SSTのことは養護教諭から教わり、そこから自分でも勉強したという。

また、3年次からは、授業にp4c (philosophy for children) 子どものための哲学」という教育手法も導入した。「正解のない問い」について、みんなが輪になって、毛糸玉で手作りしたコミュニティボールを回しながら意見を出し合う手法だ(下のカコミ参照)。授業研究のなかでp4cのことを知り、研修会に参加して理解を深めたという。話をまとめない・誘導しない・否定しないことが原則。生徒の「自分の考えを発信する力」と「他者の考えを受け入れる態度」を育むことを狙っている。

授業の進め方としては、まずは1コマを使って教科書の内容を押さえ、ある物事について「考えよう」というきっかけとなる知識を生徒が習得。そのうえで、次の授業でその知識を使って「現在の社会につながるテーマ」を議論する、という形を取っている。

例えば、班田収授法(6歳以上に農地を支給して課税もする制度)について学んでから、当時話題となっていた選挙権年齢の引き下げの話も絡めて、「班田収授法の年齢基準、何歳以上が妥当か?」を話し合う。平城京から平安京へ

コミュニティボールの効果

1 普段は話さない生徒も発言機会を得られる

グループで対話するときは、ボールを持っている人がしゃべり、話し終えたら、次に意見を聞きたい人にボールを渡すというのがルール。ボールの受け渡しで発言者がわかりやすく、全員にボールを一度は回すことで、普段は話さない子も発言の機会を得られる。

2 沈黙が続いても本人の意思表示を待てる

ボールを渡された人は、話すことがなければ、他の人にパスしていい。これも大事なルールだ。逆に、緊張や混乱からすぐに言葉は出ないけれど話そうと思っているなら、ボールを持ってほしい。ボールを渡された生徒が沈黙すると、当初は周囲が先回りしてフォローし、結果的にその生徒の発言機会を奪うことがあった。高橋先生が「パスしてもいいのだから、すぐ答えられないときも、ボールを持っているあいだは待ってあげよう」と話し、そのルールが浸透するほど、全員がより安心して話せるようになった。



の遷都を学んでから、地理で学んだ地論のことも絡めて、「日本の首都はどこにすべき?」を話し合う。

「地理も歴史も、興味のない生徒には、遠い地域や遠い昔の話でしかないんです。そこに現在の社会とのつながりを示すことで、『こうしたことは身近でも起こるんだ』だったら学びたい」と生徒に感じてほしいと思っています」



高橋先生の授業デザイン

1年次〈地理〉

⇒「書く力」を重視

校内アンケートや学級日誌の書き込みから、「自分の考えはもっている、書く力はあるが話は苦手な生徒が多い」と把握。いきなり対話は難しいので、授業は講義中心、ただし論述を増やし、考えて書く力を伸ばし、その考えが受け入れられる安心・安全な場を目指した。



2年次〈担当教科なし〉

⇒個別にソーシャルスキル

研修でソーシャルスキルトレーニング (SST) を学び、クラス担任として、コミュニケーションなどに困難を感じている生徒数名に、始業前にSSTを展開 (次年度も継続)。

3年次〈日本史・現代社会〉

⇒「話す力」を重視

週2回の授業を「知識習得セッション」と「トークセッション」に分けて2回1セットで実施。前の授業で身に付けた知識をもとに、輪になってコミュニケーションを用いながら生徒が意見を出し合うことで、自分の考えを発信・説明する力を育もうとしている。



4年次〈世界史〉

⇒「話す力」の向上

現状は「プリントに自分の考えを書いて」「ボールを回して意見を出し合う」形を取っているが、最終的にはプリントに書かなくても、ボールがなくても、対話できることを目指す。

授業を受けた生徒の声

定時制3年生のみなさん

Q 高橋先生はどんな先生ですか？

「ユーモアを兼ね備えた先生かな、と思います。僕が (藤原道長のことを) ミッチーってあだ名で呼んだら、先生はフジーとか言い出すので」
「話しやすいです。あと、はっきりとしゃべってくれるので聞き取りやすいです」
「全体的にいい人です。悪いところがあったら言ってくれるので」

Q ボールを使った授業はどうですか？

「前よりもみんなの質問とか意見が聞けるので、すごく楽しいです」
「今までみんながどう思っているかわからなかったけど、みんなの考えがわかって、自分が思いつかなかった発想が聞けてよかったです」
「なんて言えばいいかわからなくて話せなかった人と話せるようになったし、クラスでも少しみんなと話すことが増えました」
「みんなと仲良くなりました」
「楽しいです。…なんか、なんていうんですかね。みんなでコミュニケーションを取っているなあ、というのが」



生徒はどう変わったか

自分の視点で歴史を捉え、考えを口にするように

そうして学びながら考えたこと、「発信」にも力を入れるのはなぜか。「この先の就職活動でも、仕事でも、自分の考えを説明することが求められるようになっていくからです。そもそも生徒たちは何のために地理や歴史を学ぶのか。僕は、『なぜそこにあるのか』『なぜそれが起きたか』を理解するだけでなく、最終的にはそれをもとに自分の考えを発信するためではないか、と思っているんです。仕事や生活で何らかの問題に直面したときに、地理や歴史で学んだことを現実に結びつけて思考し、そこで考えたことを発信して社会と関わっていく。そうしたことができる人になってほしい、と思っています」

高橋先生は、前任校では貿易ゲームなどもやっていたそうで、以前から生徒主体のアクティブ・ラーニング (AL) に積極的だったと言える。

でも本人にその意識はない。「ALが注目されているからと、それをするのを目的にするのではなく、今の生徒たちにはどんな授業が良いかを考えていきたいです。今の3年生に対しては『話す』授業をしています。この子たちが1年生のときは、いきなり対話はまだ難しいと考え、『書く』こと中

心の授業をしていたんですよ

そうした段階を経て、今や生徒たちはボールを回すことで意見を出し合えるようになった。授業中の笑顔が増え、授業外の生徒同士の会話も多くなった。

平安末期の院政について学んだときのことだ。ある生徒が「これって今もあるよね。〇〇の会長と社長のバトルとか」と現在とのつながりを発見してくれた。さっそく高橋先生は、次の授業でその事例も示したうえで、話し合うテーマを投げかけた。「先輩からの助言・口出しはアリ？ ナシ？」

授業中のグループの対話には高橋先生も参加するが、今のところは話が煮詰まると、生徒から頼られてボールを渡されることが多い。だから高橋先生がボールを持つ時間が長くなりやすい。この時間を減らし、高橋先生も1参加者になることが当面の目標だ。

授業の対話スタイルをさらに実社会に近づける

今後行いたい授業

その先ではコミュニケーションから卒業も視野に入れる。実社会の対話にボールが存在しない。そうした場でも、生徒が生きて生きと活躍できるようにすることを目指しているからだ。